2017年10月にメキシコで開催された「Cosmic Ray Anisotropy Workshop」での議論を紹介した。観測された数10TeVまでの恒星時異方性の特徴は、太陽圏外に銀河磁場に沿うダイポール型異方性を仮定すれば、銀河宇宙線の太陽圏磁場内での軌道計算で再現できる。一方、100TeV以上で観測されている新たな異方性の特徴は、太陽圏周縁の局所的な銀河磁場構造や、銀河磁場の揺らぎによる可能性が議論されている。こうした議論では、SKやTibetによる観測結果も度々引用されている。